

登録有形文化財（建造物）

長谷寺大仏殿

- | | | |
|---|----------------|---|
| 1 | 対 象 | 長谷寺大仏殿 |
| 2 | 所 在 地 | 秋田県由利本荘市赤田字上田表115番 |
| 3 | 構造、形式
及び大きさ | 木造、宝形造、銅板葺、建築面積181㎡
下層：桁行3間、背面5間、梁間5間（裳階、正面向拝付き）
上層：桁行3間、梁間3間 |
| 4 | 所 有 者 | 宗教法人 長谷寺 |
| 5 | 登 録 基 準 | 一 国土の歴史的景観に寄与しているもの |
| 6 | 説 明 | |

長谷寺は、本荘市街地より北東の赤田地区に位置し、藩政期には亀田藩に属していた。藩主岩城氏に崇敬され、祈願所とされた寺院である。開山は是山泰覚で、安永4年（1775）に庵を結んだことが始まりである。赤田の大仏として親しまれている十一面観世音菩薩立像は、是山泰覚が天明4年（1784）に奈良長谷寺・鎌倉長谷寺にあやかかって造立を発願し、三年の歳月を要して完成させたものである。大仏殿は、寛政4年（1792）から建設が着手され寛政6年に完成した。明治21年（1888）に客殿より出火し、堂塔伽藍が全焼した。現在の大仏は、当時本荘大町の呉服商であった佐々木藤吉翁より寄進を受け、明治25年に復元され、明治29年に大仏開眼落慶法要が行われた。大仏殿も明治26年に再建され、当初の様式や規模を忠実に復元したとされ、棟札から建築年などが確認できる。

大仏殿正面は参道の軸とはややずらしているが、境内において中心的な位置に配置されている。一般に本荘由利地域の禅宗寺院の伽藍は、参道と本堂が一直線に配されているが、長谷寺においては大仏殿が中心となり、本堂はその北東部に配されている。大仏殿は上下二層で、上下層ともに四面に擬宝珠高欄が巡り、上層南面にあたる正面側には奈良の東大寺大仏殿同様の観相窓がある。外側には切目縁が廻り、18本の八角の側柱が建物を支えている。屋根は再建当初は木端葺きであったが、昭和20年代に銅板に葺き替えている。また、上層の垂木部は扇垂木である。内部は大仏を安置するため吹き抜けになっており、大仏周囲の円柱の入側柱4本が下層から上層へ一本通して大仏殿全体を支えている。彫刻や絵画などの装飾も豊富であり、棟梁を務めた宮大工の小川松四郎は、社寺建築の彫刻家としても知られており、多くの社寺建築を手がけている。また、大仏上部格天井の「三十六禽之図」は、谷文晁に師事し本荘藩の御用絵師になった増田象江、板扉絵の「三十六歌仙」は大内の堀藤兵衛の作品である。下層の寺号額、上層の山号額は、寛政7年に藩主より山号寺号を受けた際の揮毫を、再建時に復元したものである。

長谷寺大仏殿は、秋田県下にあつて唯一の大規模な仏殿であり、棟札により建立年代も明確で、秋田の近代寺院の構造、装飾等の様式を知る上で貴重な遺構の一つである。また、堂内の十一面観世音菩薩立像は昭和61年に市指定有形文化財に、祭典である赤田大仏祭りは平成9年に県指定無形民俗文化財となっており種別を越えて文化財が継承されている好例である。



正面外観



大仏殿彫刻



赤田大仏祭り（県指定無形民俗文化財）



十一面観世音菩薩立像
（市指定有形文化財）

用語説明

是 山 泰 覚^{ぜ ざん たい がく}：智仙（汗かき地蔵庵）、覚秀（龍源寺）の二人とともに、後に地域で三大傑僧と呼ばれた。

擬 宝 珠 高 欄^{ぎ ぼ し こう らん}：高欄は、縁や階段などの端に設ける装飾と安全を兼ねた手すりのこと。擬宝珠は、親柱上端などにかぶせてある覆いで、上部は宝珠形につくり、装飾と柱木口の傷みを防ぐ機能を兼ねたものである。ネギ花に形が似ているので葱台とも呼ばれる。

切 目 縁^{きり め えん}：縁板を敷居と直角方向に張った縁。濡れ縁に用いる。

木 端 葺 き^{こつ ぼ ぶ}：木端で葺いた屋根。木端は25×15×0.5ぐらいのスギなどの薄い板で、小羽板・柿板・粉板ともいう。

扇 垂 木^{おうぎ だる き}：禅宗の寺院建築に用いられる放射状に配置された垂木のこと。

谷 文 晁^{たに ぶん ちよう}：江戸時代後期の日本の画家。江戸南画の大成者であり、その画業は上方の円山応挙、狩野探幽とともに「徳川時代の三大家」に数えられる。

揮 毫^{き ごう}：毛筆で何か言葉や文章を書くこと。「毫^{ふで}を揮^{ふる}う」からこの語がある。